③ この戯曲は、日本では坪内逍遙の翻案で「霊験」と題して、大正三年九月二十六日より五日間、東儀鉄笛らの無名会によって帝国劇場で上演された。（田中栄三『明治大正新劇史資料』、演劇出版社、昭39・12・1）

④ 「同人消息」（第三次『新思潮』1巻3号、大3・4・1）

⑤ 『新思潮』一巻三号（同右）の「編輯室より」は、「山宮柳川の肝煎にて、愈々愛蘭文学号を来々月（六月号）に発行致すべく目下準備中に有之候」と述べていたが、一巻五号（大3・6・1）の「消息」によると、「山宮厳父死去のため、本月の愛蘭文学号の準備がとう〳〵整はなくって、延期と決して了った」。以後、「愛蘭文学号」に関する記事は見当らない。

⑥ 岸田国士「二つの戯曲時代」（『近代戯曲選』1巻、東方書房、昭23・1）、初出未見、のち『岸田国士全集』8巻（新潮社、昭30・7・15）に収録。

⑦ 菊池寛「久米の戯曲集に序す」（『人間』3巻6月号、大10・6・1）

⑧ 小堀桂一郎「芥川龍之介の出発―『羅生門』恣考―」（『批評』13号、昭43・9）、初出未見、のち『日本文学研究資料叢書芥川龍之介I』（有精堂、昭45・10・20）に収録。

⑨ 吉田俊彦「『青年と死』論覚え書――二つの愛とアルチバシェフ『死』の影響――」（『岡大国文論考』9号、昭56・3・1）

⑩ 注3の文献に拠る。

⑪ ヘルマン・ブロッホ著、菊盛英夫訳『ホフマンスタールとその時代――二十世紀文学の運命――』（筑摩書房、昭46・5・25）

⑫ 木間瀬精三『死の舞踏――西欧における死の表現』（中央公論社、昭49・5・25）、小堀桂一郎「死の形象」（『講座比較文学7　西洋文学の諸相』、東京大学出版会、昭49・4・25）所収。

⑬ 引用は、『世界戯曲全集16　ウエデキント、シュテルハイム集』（世界戯曲全集刊行会、昭5・4・30）所収の久保栄訳「死と悪魔」に拠った。

（もりさき・みつこ　本学大学院博士課程）

『仁勢物語』の位相

小原　亨

1

『仁勢物語』（寛永十五年頃刊）はもじりの文芸である。したがってこれまで多くの研究者にその方法が問題視され、文芸史上の意義も様々に論じられてきた。暉峻康隆氏①は、「進行する歴史にとり残された階層の、それでもおとずれた平和を嬉戯しようとする態度の所産」と評価し、その「笑いには、前向きの姿勢が感じとれない」とされた。辞書的な意味で「もじり」とは、「著名な詩文・歌謡などの調子や文句をまねて滑稽化すること」②である。たしかに、『仁勢物語』は原典『伊勢物語』の語調や文体を忠実にもじり、その滑稽性は卑俗に題材を求め、猥雑な発想や安易な方法のもじりが多い。しかし、野間光辰氏③や長谷川強氏④が評価したように、そこに当代の価値規準を照射した文芸的発想を導入した意義は大きく、次代に発展する文芸秩序の萌芽は積極的に評価されなくてはならない。

原典がもじられ滑稽化されると、価値観の転換に伴う落差が生じ、そこに笑いが発生する。すなわち『仁勢物語』にあっては、原典『伊勢物語』がもつ「雅」の価値観が、近世的「俗」の価値観に転化されている。このことは冒頭より始まる。初段では、「むかし、男」は「をかし、男」となり、「なまめいたる女はらから」は「生臭き魚、腹赤」となり、「いちはやきみやび」は「いらちたる飲みやう」というように忠実にもじられていく。原典の和歌もすべて狂歌化される。『伊勢物語』の「春日野の若紫の摺り衣乱れそめにしわれならなくに」は、「春日野の魚に脱ぎし借り著物酒飲みたれば寒さ知られず」となる。「若紫」が「魚に脱ぎし」、「乱れそめにし」が「酒飲みたれば」と、古典的情感を内包した雅語は排斥され、卑近な食物に発想を得た俗語に変えられる。これらの例だけではなく他の詞章も詳細にもじられ、徹底的に卑俗な物語に転換されている。このように食物に素材を得て、それにもじる発想は『仁勢物語』中で高い割合を示すが、その中にも「奈良酒」（初段）、「岡崎茶・宇津の十団子」（九段）、「天

野酒」(三十九段)、「明石の目張」(四十六段)、「内裏粽」(五十二段)、「伊勢の海松・青海苔」(七十五段)、「堅田の鮒」(百二十段)など、各地の名産物に素材を得たものがある。この方法は、仮名草子作品の多くが共有する諸国風俗誌としての性格の側面的なあらわれであろう。一方、『仁勢物語』には当代の事件や世態風俗に素材を求め、普遍化することも、ひとつのもじりの方法としてあった。「吉利支丹」信徒の処刑(十二段)、「唐土船」(二十六段)、「島原の乱」(三十三段)、「数寄」(六十一段)、「大傾城屋」での遊女との交歓(六十五段)、「歌舞伎する若衆」(百二段)、「浄瑠璃操」(百三段)などへのもじりは、当代風俗の凝集であり、創作意識の傾倒であった。

原典『伊勢物語』の文調や詞章をまねて滑稽化し、言語遊戯として楽しむだけがかならずしも『仁勢物語』の文芸意図ではない。大部分は原典の調子に忠実なもじりであるが、中にはそこから逸脱しながらも諸国名産品を素材化しようとする意識もある。「東下り」として有名な九段では、次のようにもじられている。

三河国八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といふことは、水の蛛手に流れわかれて、木八つ渡せるによりてなむ八橋とはいへる。(『伊勢物語』)

三河国岡崎といふ所に至りぬ。そこを岡崎とは、茶売あるによりてなむ、岡崎と思ひける。(『仁勢物語』)

ここでは「八橋」を「岡崎」にかえ、その地の名産品「茶」を素材化しようとする意識がある。これが『仁勢物語』編著者の第一義であるため、物語文中にみえるもじりの破綻も転化過程の妨げとはならない。また、第四十六段では、『伊勢物語』の「めかるともおもほえなくに忘らるゝ時しなければ面影にたつ」の和歌を、「目張をも鱶も得やは忘らるゝ御足無ければ面影に鯛」と狂歌化している。おそらくここでも「めかる」から「目張」への発想が先立ち、それより名産地「明石」が導かれ、「人の国へ行きける」の原文が「播磨の国、明石へ行きける」と具体化されたもじりへ発想が導かれたのであろう。物を素材化するのは『犬枕』(慶長十一年頃刊)や『尤の双紙』(寛永年間刊)など他の擬物語文芸にも用いられた方法であった。そこでは「物は尽し」が有効な文芸化の手段となる。『仁勢物語』でも、もじりの過程にこの方法を摂取したところがうかがえる。それは先にあげた第四十六段の狂歌のほかにも次のような用例として示される。

赤小豆餅こ餅粟餅どしつくとわが銭無くは粳も得搗かじ(二十四段)

菜は干汁菜蕪か穂蓼かも我が住む方の海人の叩か(八十七段)

なかでも第百一段では、顕著に「物は尽し」の発想があらわれている。

むかし、左兵衛督なりける在原行平といふ人ありける。その人の家によき酒ありと聞きて、殿上にありける人々、飲まむとて来たりけり。左中弁藤原良近といふ人をなむ、まらうどざねにて、その日は饗応(あるじ)まうけしたりける。なさけある人にて、瓶に花をさせり。その花の中に、あやしき藤の花ありけり。……(『伊勢物語』)

をかし、左兵衛の督なりける、蟻腰の雪女と云有けり。其人の家に、よき酒売ると聞て、上にありける酒奉行を、河豚汁・学鰹・烏賊・鰡・まらうと・からすとなん、其日の料理にしたりける。興ある人にて、瓶に酒を入たり。その酒の中に、甘酒・葡萄酒など有けり。……(『仁勢物語』)

「物は尽し」にもじられた部分は、文の調子が原典とはいささか不調和になっているが、第一義的に導入された「物は尽し」の発想に注目したい。この方法は、『伊勢物語』の享受者たち、すなわち知識階層の座の文芸として『仁勢物語』があったことを示唆している。また、先に述べた「吉利支丹」信徒の処刑や「島原の乱」などの事件、「若衆歌舞伎」や「浄瑠璃操」のほか、「今春能」(四十一段)といった流行風俗、そして「肥前瘡」(三段)などの流行病、これら素材の時好性も『仁勢物語』の編著者は意識していた。この素材の時好性もその性格付与のほかに、当世世俗と積極的に関与していこうとする編著者の創作態度のあらわれであろう。世俗との交歓をはかり、当世を構図化していく文芸意図を『仁勢物語』に認めることができる。

本来的にもじりは俗への転化の性質をもつ。諸国名産品や飲食物、そして流行風俗などに多く素材を求め、狂歌的発想でもじることにより、当世文芸としての史的位置を模索しようとするのが『仁勢物語』であった。古典への憧憬や「雅」への内向的後退と、それらの反省としての「俗」への転化と滑稽化だけが『仁勢物語』の文芸性の本質ではない。

2

周知のように近世初期は、印刷術の飛躍的発展の時代であった。古活字版嵯峨本を始めとして整版本にいたるまで、『徒然草』『平家物語』『枕草子』『源氏物語』など多数の古典が出版されていった。『伊勢物語』もその例外ではなく、多くの版が出版されたが、同時にその注釈・研究も中世以来盛んであった。なかでも特に慶長年間には、『伊勢物語闕疑抄』(細川幽斎・慶長元年)、『伊勢物語集註』(一華堂切臨・慶長元年)、『伊勢物語嬰児抄』(慶長八年)、『伊勢物語愚案抄』(後陽成院・慶長十二年)などの注釈書があいついで成立している。知識階層は、『伊勢物語』に多大の関心を示し、『伊勢物語』もまたその階層に深く浸透していた。注釈の対象となるべき古典『伊勢物語』であるから、中世から近世初期にかけての受容形態には読みものとしてだけではなく、他の側面も派生していった。『僻連抄』(二条良基・興国六年)に見える次の記述が伝える内容には示唆深いものがある。

歌は近代の人の風情を取る事なし。……ただ堪能に練習して、座功を積むよりほかの稽古はあるべからず。その上に三代集・源氏の物語・伊勢物語・狭衣・名所の歌枕、かやうの

類を披見して、有興さまに取り成すべし。

これは、和歌・連歌を習得する上での範典として、『三代集』『源氏物語』などとともに『伊勢物語』が受容されていたことを示すものである。同じことは、飯尾宗祇が長享三年、防州大内氏の招きをうけ、『伊勢物語』その他の講義をした際の注釈書として成る『伊勢物語山口記』（寛文八年版）の奥書を見ても理解できよう。

此一冊者延徳之初。防州山口にして此物語之後、初心之輩所望之間書之。然者形見えやうなる事共なるべし。於余情者筆舌難及。唯任其耳。……

『実隆公記』（天文六年以後）を見ても同様の事情を物語っている。「大永八年五月」の記述に、

廿三日、壬辰、霽、飯川山城国弘来、伊勢物語所望難去之間、文字読始之、廿六日、飯川山城国来、……今日伊勢物語文字読終功……

などの記事があり、同年六月にも

三日、竹野孫三郎・印政等来、伊勢物語始之、廿四日、甲子、晴、伊勢終功、本望也……

と記されている。このように『伊勢物語』は中世以来長く和歌の手本、歌道の教書として受容され続けてきた。同時に、近世初期には、印刷術の発展にともなって、飛躍的に歌人や連歌師の間に流布していったであろう。これら歌人・連歌師たちはその和歌を正当に受容しながら、一方では余技・遊戯としてその狂歌化を試みていたことも見のがすことはできない。

前太閤秀吉公に宮つかへしちやのゆ坊主、いど茶碗とて、御ひざうなされけるを、取はづし落してわりけり。是によつて、事外御きげんあしく、かのものあやうくみえし処に、長岡玄旨取あへず

つつ井筒いつゝにわりしいどちゃわん罪をば我がをひにけらしな

となん侍り給へば、御気色もなをり、即彼坊主もめしいだされけり。

『戯言養気集』（元和年間）下巻にあるこの狂歌咄は有名で、他に、『醒睡笑』（安楽庵策伝・元和九年）、『新選狂歌集』（寛永年間）などにも同じ狂歌咄が記載されている。また、『醒睡笑』巻之八では、この狂歌咄に続いて、同じく『伊勢物語』中の和歌を狂歌化した咄が見られる。

雄長老、ある寺に立ちより、「これに数寄屋はないか。」「いや、なし」との返事なり。「さらば、わる茶にてもたてて出されよ」と所望ありて後、

数寄屋あらぬお茶や昔のお茶ならぬわが身独は薄のみにして

『私可多咄』（中川喜雲・寛永十一年）巻二にも同じ和歌の狂歌化からくる咄が所収されている。

昔む月に人のきそはじめして、花のすがたさかりなるに、予が父いにしへの人がましき時をこひて、つぎ小袖ぬぎて見きてみ見れど、昔にはるべくもあらず、うちわらひてあば成やねの下に、日のたくるまで身づくろひし、こしかた思い出て、

つぎやあらぬ春や昔のやれ小袖予が身ひとつはもとの身にして

幽斎や雄長老、あるいは喜雲や松永貞徳など、歌人・俳人の多くは狂歌も盛んにものしていた。この時流を背景として、『伊勢物語』中の和歌も必然的に多く狂歌化された。『仁勢物語』は、狂歌による世俗の普遍化と構図化であった。世俗を狂歌的発想でとらえるとき、そこに戯笑化の態度がしばしばあらわれる。

をかし、道の端にて、ある子達の鴉を居へて通りけるに、何阿弥とか云ひけん「よしや殺生よ。南無釈迦弥陀」と云ふ。児、

罪も無き人は鵜を飼ひ罠を張り多くの肴食ふと云ふなりと云ふを、羨む坊主多かり。（三十一段）

をかし、いと若くはあらぬ。これかれ百姓ども集まりて、月を見て、それが中に名主、

大方は月をも愛でじ未進せじ積れば人の負となるもの（八十八段）

をかし、堀出しにや有けん、大橋あたりに家を買ひけり。四十両が、九十両の家にぞなりにける。中立しける翁、作事して塵まで拾ふ老らくに骨を折るとて又給ふ金（九十七段）

一方では鵜飼による殺生や租税のための生活犠牲を戯笑化し、他方では吝嗇の男を皮肉るなど、『仁勢物語』編著者は、広く世俗とそこに展開される人間諸相を対象に滑稽化していった。時には婚姻さえも戯笑化の対象となった。

をかし、男、武蔵の国までまどひ歩きけり。さて其国に在る女を婚ひけり。父は「また人にあわせん」といひけるを、母なむ頭者に心付けたりける。父はまた人にて、母なむ立腹なりける。さてなん頭者にと思ひける。此婿金を借りて、をこせざりけり。住む所なん人間の郡、三吉野の里成ける。

三吉野の田面年貢を乞はるゝに君が借りたる金返せかし

婿金返し、

我方に呉るといふなる三吉野の頼もし金をつい取り返へすとなん。人の国にても、猶借銭いやまさりけり。（十段）

原典『伊勢物語』第十段の「このむこがねに詠みて遣せたりける」とある条の「むこがね」の音は生かしながら、「婿金」ともじり、借金を素材に戯笑化していくものである。問答形式の和歌もそのまま借金返済の問答にもじるなど、この章段は『仁勢物語』全体の中にあってもよく洗練されたもじりである。

世俗を戯笑化する発想は、世俗とは距離を隔てなければ生まれない。すなわち精神的高踏性から世俗を傍観する態度があって、そこに戯笑化の発想が生じる。『仁勢物語』編著者は、世俗に関心を示し、世俗との交歓を意図しつつ、世俗に対しては精神的優位にあって、作品中に世俗を普遍化していった。おそらく彼らは、世俗的なものからやや隔った階層であるため、傍観する世俗を狂

歌的発想でとらえ、狂歌化することによって世俗を共感することができたのであろう。座という共同の創造の場で、個人によってとらえられた世俗は、座によって客観化され、座が共有する創作意識をとおして作品化されていくのである。その過程で客観化された世俗への戯笑化が生じる。客観化された世俗は、編著者の創造意識でもあり、主体的な世俗への関心とその素材化であった。また、それを可能にしたのが狂歌的発想であった。一方、世俗への関心という点では、俳諧的発想も『仁勢物語』にあっては重要視されなくてはならない。

3

先に『伊勢物語』が中世から近世期には歌書として受容されていたことを示したが、俳諧の世界にあっても、『伊勢物語』は同義の役割をはたしていた。

『詠歌の大概』にも、『古今集』『伊勢もの語』『後撰』『拾遺』をまなぶべし、又『白氏文集』第一・第二の帙、常にもてあそぶべし、とも あそばしたり。……いまの俳諧はばさらごとゝのみこゝろへてするにより、あるは連歌しのそしりにあひ、あるは歌よみのにくみあへる事也。これ俳諧師の学文せぬ故也。……歌も連歌も俳諧も、才智なく文盲にして、なんぞ堪能の名をも得、上手とも人によばれんや。この才そなはりて、俳諧の寓言活法をいひし、よき句とおぼしきを書つけ侍りぬ。よろしとおもはん人は、まなぶべし、〳〵。

『俳諧蒙求』（岡西惟中・延宝三年）でこのように説かれるように、俳諧にあっても『伊勢物語』は他の和歌集とともに、学ぶべき書として示唆されていた。また、慶長から寛文年間にかけて、俳諧師のなかには『伊勢物語』の注釈を試みた者も多く、『伊勢物語集註』（一華堂切臨・慶長元年）、『伊勢物語集註』（和田以悦・承応元年）、『伊勢物語初冠』（加藤盤斎・万治三年）、『伊勢物語拾穂抄』（北村季吟・寛文三年）、『伊勢物語新抄』（加藤盤斎・寛文八年）、など数多くの注釈書が刊行された。これらのことが示すように、俳諧師の間にも『伊勢物語』は、幅広く深く浸透していたことがうかがえる。『伊勢物語』にとっての俳諧的発想も想像にかたくない。

ふたたび『仁勢物語』初段を見るならば、「をかし、男、頻被りして、奈良の京春日の里へ、酒飲みに行きけり、その里にいと生臭き魚、腹赤といふ有けり」で始まる章段であるが、原典『伊勢物語』の「女はらから」をもじった「腹赤」は、俳諧でもしばしば素材化されたものであった。『詞林金玉集』（桑折宗臣編・寛文十一年）の巻一「春一」には次のように述べられている。

腹赤贄

口真似草　はらかこそ嘉例めてたうおはし鱒　野也　京高梨氏

続詞友集　腹赤もや備ふれはいをますの魚　種寛　同朝江氏

同集　一と世に一度来鱒はらかかな　友静　同井符氏

風俗草　あきらかな御代の腹赤やます鏡　宣為　江州川河島氏　並

細少石　ふるき例又あたらしき腹赤哉　武宗　山州伏見井川氏

土塵集　築紫よりの腹赤の魚やにし肴　宗賢　京小島氏

口真似草　雲井まてあくるはあまのはらかかな　正種　賀州金沢高田氏

「腹赤」を素材化した発句が七句所収されていることに注意したい。このように俳諧の用語を素材化したもじりは『仁勢物語』に数多く見られる。ここで、それらを順に取りあげてみたい。

道すがらしどろもぢずり足元は乱れそめにし我奈良酒に

（初段）

是は二条の戻橋のもとに、柄巻屋にて居たりけるを、刀の柄糸・目貫など盗まれて、（第六段）

をかし、男、いとうるはしき友有けり。片時去らず、相思ひけるを、播磨の国、明石へ行きけるを、いとあはれと思ひて、別れにけり。月日経て、目張に文添へて……

目張をも鱶も得やは忘らるゝ御足無ければ面影に鯛

（第四十六段）

をかし、男、伊勢の国にて所帯してあらむと云ひければ、女、

大淀の浜に生てふ海松なりと心のまゝに食ひてあれかしと云ひて、まして酒も無かりければ、男、

袖濡れて海人の刈り干す青海苔や海松を菜にて止まんとやする

女、

五月より出来る麦飯味なくは塩に漬けたる貝もありなん

（第七十五段）

菜飯あらばいざちと食わん都人わが思ふほどは有りや無しやと（第九段）

をかし、山寺の稚児たちの花見に、飯酒も無かりければ、腹に飽ける菜飯はいつも食ひしかど今日の花見に煮る米も無し（第二十九段）

河豚汁に去年の茄子の香の物あな塩辛し人の心は

（第五十段）

をかし、茄子好みなりける女茹でゝ食ふて、

などてかくはや年寄に成にけん水茄子ぞと峯りし物を

（第二十八段）

つといつか猪食ひし丸額割りにけらしな飯汁の椀

（第二十三段）

いかでかは鳥の鳴くらんあかゞりをそくふ続飯にまだ夜深きに（第五十三段）

をかし、男、伊勢の斎宮に宮仕へしける。かの宮の杉と云ひける女と、私女夫にて紙子縫はせて詠める。

縫ひ破る紙子は狭く成ぬべし大宮絹の裏の広さに

女、

強くとも著てもみよかし紙子をば風の通せるものならなくに（第七十一段）

『毛吹草』（松江重頼・正保二年）には次のような記述がある。

巻四　従二諸国一出ル古今ノ名物聞触見及類載レ之……

山城　畿内

……二条　薬種　洗鮫　秤　キセル　釜　鐶鎖　金義鑷　佐伯柄巻　……

大和

……飯鮨　僧坊酒　東大寺蘭奢待……

伊勢

……馬瀬青苔　二見　防風　海松……

幡摩

……二見蛛蛸　明石赤目張　碁石貝……

巻二　誹諧四季之詞

五月

……麦秋　麦飯（切麦麦粉）……

六月

……ゆふかふ　茄子（同花）　小角豆……

十月

……たんほ　菜飯　茎菜……

誹諧恋之詞

……若衆　丸ひたい　杯の付さし……

『誹諧初学抄』（斎藤徳元・寛永十八年）にも同趣の記述がある。

四季の詞

中夏

……ひめ瓜　茄子　さゝげ……

中冬

……ひゞ　あかゞり　雪やけ……

『詞林金玉集』でも、次のように示されている。

巻十四　冬一

紙子

毛吹追加　拝むともなくて手をもむかみ子哉　未得（江戸石田氏）

（以下「紙子」の句三十八句所収）

もとより俳諧は滑稽を旨とする。『伊勢物語』をもじり狂歌化することにより、その滑稽化・卑俗化を意図した『仁勢物語』であるから、俳諧的発想の導入は自然なものであった。世俗の素材化と、俳言の使用により『仁勢物語』の通俗性はさらに深化されていった。俳諧の精神については『俳諧蒙求』に次のような一文がある。

俳諧といふは、たはぶれたること葉の、ひやうふつと口よりながれ出て、人の耳をよろこばしめ、人をしてかたりわらはしむるこゝろをいふなり。

この「たはぶれ」に「人を……わらはし」める精神こそが、『仁勢物語』に注入された俳諧的発想の所産である。俳言、すなわち俗語による世俗の点描と、俗的感覚による作品の普遍化、そこからもたらされる戯笑の態度、これが『仁勢物語』での俳諧的発想による創作意識であった。

しかし、『仁勢物語』にあらわれた俳諧的精神は、その負数価値も指摘される。『天水抄』（松永貞徳・寛永二十一年）巻二に次の記述がある。

いかに誹諧なればとて、いやしき事をすべからず。……上手の句に賤き事并漢語など有とて、若輩の初心の者、貴人・上﨟の御前にて、腰より下の噂、いやしき食物の名、米銭、商売の利勘なる事などを仕る事、さん〳〵の義也。

ここで素材として制約された「腰より下の噂、いやしき食物の名、米銭」などは、まさに『仁勢物語』に取りあげられた素材であり、素材化の意識は「いやしき」ものとして否定されるものであった。しかしながら、『仁勢物語』のもじりの第一義は、原典をいやしめ、俗へ転生させることであり、そのためには「いやしき」精神による俗へのあくことのない志向を『仁勢物語』編著者は意識していた。制約された素材であり、俳論上では否定的にあつかわれる「いやしき」素材といえども、その通俗性をもって『仁勢物語』の俗的感覚は振幅され、原典の卑俗化・滑稽化は徹底されていった。原典のもつ「雅」的情趣は徹底的に破壊され、新たに「俗」的価値感により転生された戯笑文芸として、『仁勢物語』は成立した。ここに『『仁勢物語』の位相がある。

4

仮名草子の方法の未完性は、のがれがたいものであり、近世初期文芸が共有した特性であった。そこでは、しばしば前代文芸の価値規準が適用されることもある。『うらみのすけ』（慶長年間刊）や『露殿物語』（寛永元年刊）あるいは『ねごと草』（寛文二年刊）にしても、まだなお中世風恋物語の情感を残存させていた。『犬枕』や『尤の双紙』の方法も、『枕草子』の「物は尽し」からの発想であり、素材も猥雑なものが多い。『仁勢物語』の場合も事情は異っていない。『仁勢物語』は、当時の『伊勢物語』の流布を背景として、初めて存在の基盤をもち、その享受も可能となった。知識階層、いわば宮廷貴族サロンの座の文芸として成立したであろう『仁勢物語』であるから、サロンにあっては『伊勢物語』と『仁勢物語』は共通に享受されていた。つまり『伊勢物語』をもじり、文芸化する発想が生じたとき、常に『仁勢物語』の語調・文体は『伊勢物語』と照合されているのである。また、『仁勢物語』享受の方法も、『伊勢物語』の「雅」的情趣を感得したうえで、『仁勢物語』の「俗」的感覚を体験しなくてはならなかった。そうすることにより、『仁勢物語』の卑俗性・滑稽性は深化され、価値感の転換とその落差による笑いも増幅される。

しかし、『仁勢物語』の文芸性は、全面的に原典『伊勢物語』に制約・規制されているのではない。第四十段を見てみたい。

をかし、若き男、芸にもならぬ相撲を取けり。嬉しがる親にて、よく取ると思ひて、此子を外にて取らせんとす。……独子なれば、甘やかしければ、取るに勢なし。……さる間に、相手はいや勝りに勝る。俄に親此子を連れて行く。此子……出て取りぬ。此子なよ〳〵と詠める。

出て取らば誰か我には勝たざらんありし力も今日は悲しもと詠みて投げられにけり。親慌てにけり。よく取ると思ひてこそ取らせしか。いとかくも投げられじと思ふに、真実に絶

へ入にければ、方屋にて願立てけり。……昔の阿呆は、さる相撲をなん取りける。今の各まさに仕なんや。

相撲好きの親が、その性分のために狂態を演じ嘲笑され、失笑をかう構想は、後の西鶴によって『本朝二十不孝』でも普遍化されているし、江島其磧も『浮世親仁形気』でその構想を模倣した。また、第六十五段の「大傾城屋」での遊女と客のおりなす男女の交歓の相、駈落ちの不成就による哀感を排除させる男の「声はおかしうて阿呆気に歌ひける」狂態などを構図化した咄、第六十九段の「博奕打」の狂態など、これら三章段は、『仁勢物語』全体の中にあって、よく統一された狂歌咄であり、その方法化の完成度も高いものと認められよう。このようにただの原典のもじりにとどまらず、一段と複相化された戯笑性は、『仁勢物語』に独自の文芸性を与えている。

仮名草子の方法の未分化は、近世文芸としての成立の可能性を内在していた。『仁勢物語』でも、一方では狂歌的発想により世俗と交歓しながらも、客観化された世俗の戯笑性は、他方では世俗を観照的態度でとらえ、ひたすら卑俗化へと収斂させる俳諧的発想による滑稽化の方法が模索された。ここにいたって『仁勢物語』は編著者の言語遊戯の域を脱して、近世戯作文芸の萌芽としての文芸性をもつこととなった。

注① 「仮名草子」（岩波講座『日本文学史』近世Ⅰ）所収。
② 『日本国語大辞典』（小学館）
③ 『仁勢物語』解説（日本古典鑑賞講座『御伽草子・仮名草子』）所収。
④ 「仮名草子」（講座日本文学近世編Ⅰ）所収。

（おはら・とおる　大阪府立門真西高等学校教諭）

「思はぬ方にとまりする少将」小考

――短編物語の手法――

野村倫子

一　題名の担う役割（序章に代えて）

短編物語にとっては、短い中に主題と場面をいかに簡潔にまとめ得るかが生命であろう。主題を強く前面に押し出すという点で、題名そのものが内容と直接的に関わる場合が多い。長編の場合には、『源氏物語』『狭衣物語』のように主人公の名前を漠然と冠するだけで、個々の事件を暗示するようなものはない。それに対して、短編の場合、題名そのものが、本文を紐解く前に内容の一端を担って、読者に相対している。むろん、題名がそのまま素直に手の内を見せているわけではない。時には、題名によって読者に先入観を抱かせておきながら、最後にひとひねりしてみせる手法をとることもある。例えば『堤中納言物語』におさめられた「花桜折る少将」は、女性を手に入れる意味の標題を冠しながら、いざ盗み出してみると、それは思いを寄せていた姫君ではなく、老いた尼であったというおちでまとめられている。

「思はぬ方にとまりする少将」の場合も、古歌に通じているほどに題名によって足元をすくわれるようになっている。物語の荒筋は、大納言の遺児の姉妹が偶然にも権少将と少将を各々の配偶者として通わせ、男の官位の類似から、誤って我が夫ならぬ男と一夜を過ごすというものである。「花桜折る少将」と同様に「取り違え」を主眼に置いている。

さて、「思はぬ方にとまりする少将」の題名は『拾遺和歌集』の源景明の歌に拠るとされる。①

女のもとにまかりけるを、もとのせいし侍りければ
源景明

風をいたみおもはぬ方にとまりするあまのを舟もかくやわぶらん②

右の一首を知る者は、まず男が本妻とは別な女性と交渉を得る話かと予測するであろう。しかし、物語は、「思はぬ方にとまり